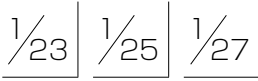


## 楽 曲 紹 介

解説=松本 學



本日のプログラムのテーマは、“文学に基づく交響詩”。どれもオーケストラの持つ表現能力を存分に引き出した、描写性の極めて高い作品ばかりである。

デュカス (1865-1935)

### 交響的スケルツォ『魔法使いの弟子』

ポール・デュカス(1865-1935)はパリに生まれたフランスの作曲家。才能を高く評価され、名声もあったが、自らに厳しく、限られた作品しか遺していない。しかし現存する作品は、交響曲やピアノ・ソナタ、歌劇『リアーナと青ひげ』、バレエ『ラ・ペリ』などどれも優れたものばかりである。その中で最も知られているのが、この『魔法使いの弟子』だ。交響詩と分類されるが、原タイトルは「ゲーテのバラードによるスケルツォ」。1897年に作曲され、同年5月18日に初演された。

ストーリーは以下の通り。師の魔法使いが出かけた際に、見よう見まねで覚えた魔法を使ってみる弟子。箒を下男の姿に変えて水を汲みに行かせ、水甕に運ばせる。しかし終了の呪文を忘れたため、いつまでも水が運ばれ続け、あたりは大洪水に。箒を壊せばと思いつき2つに叩き折ってみれば、今度は2本になって水を運ぶという悪循環。てんでこ舞いしているところに戻った師匠は、泣きつく弟子に、練達の師だけが魔法を使えるのだと諭す。

曲の冒頭はアセラン(十分にゆっくりと)。ヴァイオリンによる〈呪文のモチーフ〉に始まる静かで幻想的な開始である。すぐに続くクラリネットの旋律〈動かぬ箒のモチーフ〉が後の主題を暗示している。どよめくような部分が2回挟まれ(1度目にはピッコロ、フルート、オーボエ、クラリネットが〈弟子のモチーフ〉を提示)、ヴィフ(快活に)の主部に。バスーン(ファゴット)のコミカルな主題〈動く箒のモチーフ〉が始まり、極めて描写的に展開されてゆく。和声的にも大胆で、理知

的にして技法的にも高度な本作は、ストラヴィンスキーの『花火』(1908年)やドビュッシーの『遊戯』(1912年)などに影響を与えたとされる。

ディズニーのアニメーション映画『ファンタジア』(1940年)の一篇に用いられたことでも名高く、その完成度の高さもあって、続編として製作された『ファンタジア2000』(2000年)でも唯一、オリジナルから再び採用された。

【作曲年代】 1897年 【初演】 1897年、パリ

【楽器編成】 ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、サスペンデッドシンバル、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール)、ハープ、弦楽5部

## ザンドナーイ (1883 - 1944)

### あるお伽話<sup>とぎばなし</sup>の印象『白雪姫』

リッカルド・ザンドナーイ(1883-1944)はトレンティーノのロヴェレート出身の作曲家・指揮者。ペーザロでマスカーニに師事し、後にはスペインに赴き、現地の音楽を採集するフィールドワークも行なった。一方、統一を果たしたイタリアに残っていた他国の支配地を取り戻そうという、いわゆるイレデンティズモ(未回収地回復運動)の活動家でもあり、そのため、オーストリアから有罪判決を受けてもいる。

作曲家として最も知られているのは、歌劇『フランチェスカ・ダ・リミニ』で、そのほかにフルート作品もよく演奏されている。

『白雪姫(ビアンカネーヴェ)』は「管弦楽のためのあるお伽話の印象」と題されてもおり、名高いグリム兄弟の『白雪姫』を題材に、1939年に作曲。出版はミラノのリコルディ社から1943年にされたようだ。元々はバレエ用に書かれており、初演は1951年3月31日にローマ歌劇場で、オッターヴィオ・ジーノの指揮、グリエルモ・モレージ(注)の振付、アッティリア・ラディーチェ(スカラ座のプリマで、1935~57年にローマ歌劇場のプリマ・ナレリーナ・アッソルータも務めた)とグイド・ラウリ(ローマ歌劇場のプリンシパル)の当時の名コンビによって演じられた。

注: モレージは、ローマ出身の俳優、ダンサー、振付家。1952年にボーイトの歌劇『メフィストフェレ』も振り付けている。

曲は大きく5つの部分で構成。

まず**第1部**はアンダンテ・コン・モート、カルモ・エ・センプリーチェ(静かでシンプルに)と指示されて開始。冒頭からクラリネットが白雪姫の歌を提示し、9小節目からはオーボエと第1ヴァイオリンがそれを繰り返す。この主題は全体で何度も登場する。

**第2部**はアンダンテ・モツ。森の場面。白雪姫は道に迷い、小人たちの家で眠りにつく。曲の終わり部分では *PPPP* のように極めて静謐に歌われる。

**第3部**はアレグレット・ピウットスト・モツ。小人たちの到着。前打音が特徴的なバスーンの旋律に始まる。

**第4部**はアンダンテ・モツ。死者の鐘。小人たちは涙にくれ、白雪姫を山の奥へと運ぶ。死を告げる鐘 (*sf*  $\longrightarrow$  *p* で表現) が繰り返され、コーラングレ(イングリッシェ・ホルン)が悲しみの旋律を歌う。

**第5部**はアレグロ・ジュスト。王子が駆けつける。白雪姫は息を吹き返し、すべてが歓喜に包まれる。

【作曲年代】1939年 【初演】1951年3月31日、ローマ

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシェ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、シンバル、シロフォン)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦楽5部

## リムスキー=コルサコフ (1844 - 1908) 交響組曲『シェエラザード』 Op.35

ロシアの作曲家リムスキー=コルサコフ(1844-1908)は、管弦楽の大家と言われ、日本でも彼の著作である『管絃楽法原理』の一部や『和声法要義』などが翻訳出版されていた。彼はまたストラヴィンスキーの師でもあり、彼はその返礼に『花火』をリムスキー=コルサコフの娘の結婚祝いに贈っている。

『シェエラザード』は、1888年に作曲、同年にサンクトペテルブルクで初演された。タイトルのシェエラザード(シャハラザード)とは、イスラムの説話集『千夜一夜物語(アラビアンナイト物語)』の登場する女性の名である。女性不信に陥り、夜伽の後に相手の女性の首を刎ねるようになっていた王。彼を改心させようとその妻となったシェエラザードは、夜毎に王に物語を語り聞かせ、その続きを聞きたいがために、王は彼女を生かし続けるというのが本書全体のプロットである。

1910年にはミハイル・フォーキンの振付でバレエ化もされた。

### 第1楽章:海とシンドバッドの船

ラルゴ・マエストロで、どっしりとしたシャリアール(シャフリヤール)王の主題が最初に鳴らされ、曲は幕を上げる。すぐにレントに転じ、ハーブのアルペッジョに飾られながら、独奏ヴァイオリンがシェエラザードの主題を語るように歌い出す。アレグロ・ノン・トロポに入ると、最初の物語の部分となり、海とシンドバッドの逸話が語られてゆく。作曲家自身が海軍出身のためか海の描写が巧みで、チェロとヴィオラから始められる山型のアルペッジョが大洋のうねる波を見事に表現している。

### 第2楽章:カランダール王子の物語

レントでシェエラザードの主題が歌われ、次の物語が語られ始める。アンダンティーノの主部に入り、バスーンの独奏が描くのは、道化者のカランダール王子。オーボエの独奏が続く。アレグロ・モルトからは付点で始まる力強い主題がトロン

1/23

1/25

1/27

ボーン、トランペットの順に提示され、展開されてゆく。

### 第3楽章：若き王子と王女

アンダンティーノ・クワジ・アレグレット。弦楽器の柔和で美しいメロディが歌い出される。中間部では小太鼓の刻むリズムに乗ってクラリネットが楽しげに登場。シェエラザードの主題はその後に登場する。

### 第4楽章：バグダッドの祭り、海、青銅の騎士のある岩での難破、終曲

アレグロ・モルト。シャリアール王の主題とシェエラザードの主題が交互に2度提示され、ヴィーヴォとなりバグダッドの祭りの場面となる。ヴィオラがリズムを刻み、フルート、ヴァイオリンが踊る。さらに第1楽章の海の描写が姿を現し、荒れ狂う波によって船は難破してしまう。最後はシェエラザードの主題と王の主題が弱音で並奏されるが、次第にひとつに溶け合い穏やかに消えてゆく。

【作曲年代】1888年 【初演】1888年、ペテルブルク

【楽器編成】ピッコロ、フルート2（2番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2（2番はイングリッシュホルン持ち替え）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、サスペンデッドシンバル、シンバル、タムタム）、ハープ、弦楽5部

まつもと・まなぶ（音楽評論家）／音楽、バレエ・ダンス、映画の批評。『レコード芸術』『音楽の友』などの雑誌や、CD・DVD解説、演奏会プログラムへの執筆のほか、多くの海外取材、各種コンサートの企画・サポートも務める。共著に『地球音楽ライブラリー ヘルベルト・フォン・カラヤン』、『知ってるようで知らない バッハおもしろ雑学事典』など。